

刻みのある板梯子

板梯子は長い板材の片面に、足を掛ける段（踏面）を削り出したもので、平坦な上面の段と斜めに抉った下面で構成されます。

唐古・鍵遺跡では、5例ほどの板梯子が出土していますが、完全な形のものも、今回紹介するものと製作途中品の2例しかありません。板梯子は大きな部材なので、壊れたり、転用されたりし、原形では残らないのです。展示している板梯子は、直径約20センチの丸太材を板状に削ったもので、下端は地面に突き刺すため尖っています。よく使い込んだ梯子のため踏面の部分は擦り減っています。

さて、1936年の唐古池の調査で出土した絵画土器（第1・2室ゲート・小窓ケースに展示）に、2人の人物が建物にかけた梯子を登っている姿が描かれており、高床建物の存在が注目されました。戦後、登呂遺跡の調査では板梯子が発見され、高床建物の存在が初めて証明されることになったのです。弥生時代の板梯子は、1・5段から2段のものが一般的で、およそ60度の角度で立てかけると、高床建物の床高は

1・3段から1・8段となります。教科書でお馴染みの高床式倉庫の大きさは、これを元にして復元されました。

しかし近年、各地で大型建物跡が発見されています。唐古・鍵遺跡では大型建物（模型）の床高を2・6段、池上曾根遺跡（大阪府）では床高を4段として復元しており、これにかけると梯子となると、3段以上の長さが必要で、黒井遺跡（佐賀県）では、3・8段の板梯子が出土していますが、3段を超える例は少なく、大型建物にかけた梯子については検討の余地が残ります。

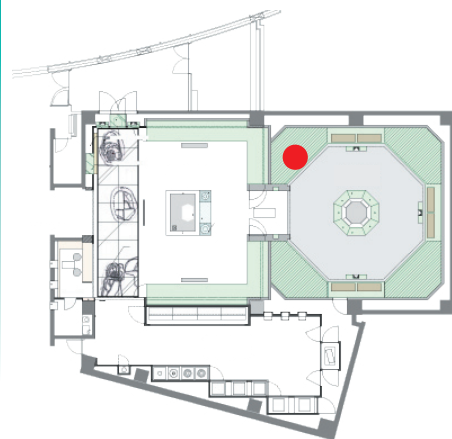
『出雲国風土記』には、「高屋（高社）を建て、そこに高椅（高い梯子）を架けて昇降させることで、靈威を依り憑かせようとした」という記述がみられます。また『播磨国風土記』や『日本書記』にも「ハシ（梯子）」に関する記述がみられ、「ハシ（梯子）」を、神の世界に往き来する装置と考える説もありです。

板梯子は、大型建物の性格を考えると、うえで重要な鍵を握っています。



●コレクション・データ

時代 弥生時代後期
調査 唐古・鍵遺跡第54次調査
発見年 1993年
大きさ 長さ118.5cm、幅18.9cm、
厚さ9.0cm
展示位置 第2室「弥生の住まい」



ミュージアム上面図と展示位置